

令和4年度 文京区議会文教委員会 視察報告書

1 視察日程

令和4年5月13日（金）

2 視察目的

「GIGAスクール構想における学びに関する調査・研究」

3 視察先

- (1) 区立茗台中学校
- (2) 区立指ヶ谷小学校

4 視察参加者

委員長	品田	ひでこ	
副委員長	萬立	幹夫	
委員	海津	敦子	
委員	関川	けさ子	
委員	白石	英行	
委員	松丸	昌史	
委員	山本	一仁	
委員	のぐち	けんたろう	
委員	松平	雄一郎	
説明員	木村	健	（教育推進部学務課長）
説明員	赤津	一也	（教育推進部教育指導課長）
随行者	小野	光幸	（区議会事務局長）
随行者	杉山	大樹	（区議会事務局議事調査担当主査）

視察概要

1 視察目的

区教育委員会では、文部科学省の「GIGAスクール構想」に基づき、Society5.0時代の到来を見据えた、従来の指導方法にとらわれない授業スタイルを創造するため、令和3年4月より児童・生徒に1人1台のタブレット端末を配備している。

今回の視察は、区立茗台中学校及び指ヶ谷小学校でのタブレット端末の活用状況や課題を伺うとともに、実際にタブレット端末を使用した授業を確認した。

2 視察先

- (1) 区立茗台中学校
- (2) 区立指ヶ谷小学校

3 事業概要

(1) 事業目的

本事業は区の重点施策であり、令和3年度から6年度にかけて「Society5.0の教室」プロジェクトとして実施。児童・生徒に1人1台ずつ配備されたタブレット端末や、各教室に配置されているアクティブボードや電子黒板等ICT機器、通信ネットワークやクラウド環境を最大限活用し、Society5.0時代の到来を見据えた、従来の指導方法にとらわれない新しい授業スタイルを創造することを通して、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現することを事業の目的としている。

(2) 事業計画（令和3年度～6年度）

令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
○1人1台のタブレット端末の配備と環境の整備	○授業におけるタブレット端末の効果的な活用場面の検討・実践及び実践事例の区内での共有 (「Society5.0の教室」推進委員会)		
○学習支援ソフトのクラウド活用			
○コロナ禍における学びを保障するハイブリッド授業に取り組む教員の先行実践及び実践事例の区内での共有 (「ハイブリッド授業」研究委員会)	○コロナ禍における学びを保障するハイブリッド授業の実施	○蓄積されたデータ（学習履歴・指導履歴）を活用し、個々の資質・能力を最大化する指導法の開発・実践	○1人1台端末が日常化した子どもたちと教員、保護者、地域による新しい学校の創造

(3) タブレットの導入効果

① 一斉学習

動画だけでなく、インターネットで調べた情報等のデジタル教材を拡大・縮小、画面への書き込み等の機能を活用することで児童・生徒の興味・関心を高め、授業がより分かりやすいものになっている。

② 個別学習

自分の作品やノートだけでなく、板書などを写真で記録したり、学習支援ソフトのドリルで学習した自分の記録を保存したりすることによって、子どもたち自身がより主体的に学ぶことができる環境が整えられている。

③ 協働学習

学習支援ソフトを活用することで、リアルタイムに友達と考えを共有し、多様な意見に触れられるようになっている。自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いたりしながら、学習をまとめることができるようになっている。

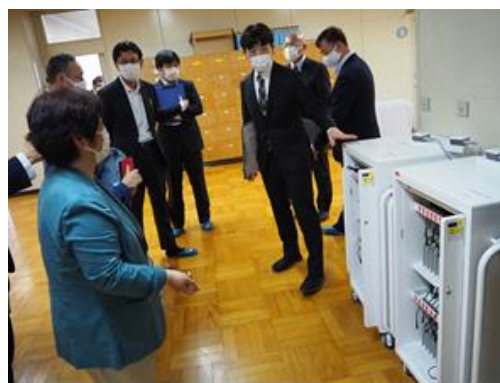
その他、全校朝会や集会などを各教室に配信、入学式や卒業式、運動会等の学校行事の様子を保護者に向けて配信するなど、各学校の実状に応じて活用。

また、教職員の研修や日々の会議をオンラインで開催するなど、タブレット端末を活用した教職員の学びにも取り組んでいる。

4 視察の様子



ICT活用状況説明（茗台中学校）



タブレット端末充電機器（茗台中学校）



ICTに関する研究説明（指ヶ谷小学校）



タブレット端末を使用した授業（指ヶ谷小学校）

視察を終えて

「文京区G I G Aスクール構想」の第一歩

委員長 品 田 ひでこ

「文京区G I G Aスクール構想」は、令和3年度当初から児童生徒にタブレット1人1台が貸与され、また学校のICT環境が徐々に整備されてスタートを切りました。

この度、文教委員会としては、「G I G Aスクール構想」の第一歩を踏み出した区内の小、中学校の現場を視察し、さらに5月の委員会で課題を明確にし、今後のICTを活用した教育が、効果的に有効的に児童生徒の学びを保障し推進されるように議論させていただきました。

まず、現段階の課題や問題点については、①教員の力量の差を解消するための研修や取り組み。②従来の授業スタイル（アナログ）とICTを効果的に活用した授業計画と準備。③児童生徒の習熟度に差があることを前提としたICT教育の進め方。④家庭教育で子どもへのサポートに格差が生じていることへの是正と保護者の不安解消。⑤不登校生徒への対策、学級閉鎖における授業の取り組み。⑥ICT支援員の増員配置。⑦ICT教育に見合った教室の空間のあり方。などです。

まだ最初の取り組みですので、「トライ&エラー」を繰り返すことや課題の共有、ブラッシュアップすることにより、教員の授業の質も向上し、児童生徒の学びも充実していくことでしょう。

文京区の教育に期待しています。

だれもが平等に活用、授業での意欲を向上させるICT活用を

副委員長 萬 立 幹 夫

指ヶ谷小学校のとりくみに注目しました。全教員がICT技能を高め、子どもたちが1人1台端末を活用した学びを、確実に深めることができるようにするため、特に全教員のICT技能を高めることを重視しています。効果のあった活用例を全教員で共有し、技能を高めることが大事です。

タブレットを活用した取り組みはコロナ禍で児童同士の交流が難しい中で意見交流できる手段として、また事情があって登校が難しいケースのときも学びを保障するためには有効です。だれもが平等に活用でき、授業での意欲が向上することを望みます。

同時に、いま国が急速に推進する「G I G Aスクール構想」については、専門家や各国の取組などを参照して慎重に進めることが大事です。ICTは学びの道具としての活用としてきわめて高い効果があることを前提としながらも、“ICT教育は深い探究的な思考に適していない。”とか“学びが個人化して協同の探求が阻害される。”などの指摘もされています。本来教育のもつ対面でのコミュニケーションや、真理を見出す討議や人間同士のふれあいなどは絶対に欠かせません。これまでの経過を踏まえての、ICTを活用した教育のあり方が求められます。

「個別最適な学び」を創る

海 津 敦 子

「教員の連携力がさらに求められる」。視察を終えて痛感したことです。

新学習指導要領は、児童生徒一人ひとりの学びの到達度を的確に把握し、個々の強み弱みに応じた指導方法で学びを深め広げ、自信につながる「個別最適な学び」を目指しています。そのためにはICT活用も不可欠です。ただ、ICTを活用するベースには、個々の学習状況を客観的に評価・分析するアセスメントが欠かせません。しかし、現状は十分なアセスメントができているとは言い難い状況です。

アセスメントには多様な視点が必要です。教員一人が感覚的に児童生徒を評価するのではなく、他の教員のみならず、臨床心理士やスクールソーシャルワーカー、ICT支援員といった専門家ともつながり多面的な評価をする。さらには、児童生徒の学力調査等をAIで分析する等の客観性も必要です。何より、児童生徒の「できない」「わからない」を子どもの努力不足等に転嫁せず、教員が提供する教材、指導の手法について省察、改善も同時に行いつつのアセスメントでなければなりません。

ICTを効果的に活用するためには、教員が「協働」で教育活動を積み上げることなくしては「ICTをつかっています」ということに終始すると思います。子どものために教員が連携する時間を生み出すためにも、教員の働き方改革をすすめていきます。

GIGAスクール構想・茗台中学校等を訪問して

関 川 けさ子

茗台中学校では英語、指ヶ谷小学校では算数の授業を見させていただきました。どの子どもたちも懸命に取り組んでいる様子が伺えました。それだけにICT支援員の配置を的確に行い、1人1人に目が行き届く体制を整えていくことが大切だと思いました。

コロナのような感染症の際にオンライン授業をするなど、今回のような事態に必要な場合もあると思います。また、オンライン授業によって不登校の子どもたちたちが、授業に参加できるようになるなどの利点もあるのかと思います。ネットワーク基盤の整備は大事なことだと思います。

しかし、GIGAスクール構想の元になった経済産業省の研究会の提言では、子どもたちがバラバラに学ぶ方向が示されており、AIへの依存などで学びの共同が崩れるのではないかと懸念が出されています。

また、東大名誉教授の佐藤学先生は、2015年にOECD（経済開発機構）のPIISA（国際的な学習到達度調査）調査委員会がまとめた加盟国の学校でのICT活用と教育活用に関する報告書では、読解力、数学、化学の3領域でコンピューターの利用時間が長いほど学力が低下している。ICT教育を推進すればするほど学力は低下するという警告を発しています。私もそのように思います。今、必要なのは、公教育を守り、創造性、探求、協同の学びで教育の質を高める改革こそ必要なことだと思います。

人づくりなくして国づくりなし

白石英行

新型コロナウイルス感染症下で子供達の環境変化に対応して頂き、校内で元気に楽しそうに勉強に取り組んでいる児童・生徒達を拝見させて頂き、改めて感謝致します。

指ヶ谷小学校では、「レッツICT」を掲げ、教員技能の向上、情報モラルのガイドラインを策定し取り組み、全教員の同一水準確保に向けて努められており、授業では、アクティブボード・電子黒板やアプリを活用して、授業内容の充実や習熟度別の展開を視察させて頂きました。

茗荷谷中学校では、Society5.0社会を見据えた授業スタイルの創造に取り組み、ハイブリッド授業では不登校生徒等の教育機会への保障を確保されていること、中学生年代の高度な能力を育むために、果敢に「トライ&エラー」を繰り返し、対応をされていることを確認致しました。

今後これらの取組が教職員と児童生徒・保護者の間で応用され、より良い教育に発展する為に、年代別の能力に合わせた段階的な活用計画や新たな技術革新が伴うソフトの活用が求められます。学校の使命達成の為に、更なる研究や研修を積み重ねて、アクティブボード・電子黒板の拡大化やアプリを充実させて、理解度が高まる教育と多彩な体験ができることを期待します。

文京区におけるICT教育の取り組みについて

松丸昌史

国のGIGAスクール構想により児童・生徒に1人1台ずつ配備されたタブレット端末や、各教室に配置されている電子黒板等のICT機器を活用して取り組んでいる授業を茗台中学校、指ヶ谷小学校を視察しました。

茗台中においては、ICTに特化した先生の存在がいた事により学校全体においてICT教育の普及啓発が教員などに浸透したことによりスムーズに導入されました。さらに新しい授業スタイルの一つとして、新型コロナウイルス感染症への不安や病気療養等により、学校での対面の授業が受けられない状況においても児童・生徒の学習を継続するためハイブリット授業にも積極的に取り組んでおり、不登校児童・生徒の教育復帰や社会的な自立へ向けての取り組みもとても感銘をしました。また、タブレットを自宅へ持ち帰る際にも目的を明確にして自宅での学習に取り組むようきめ細やかな取り組みをしておりました。

今後の課題としては、ICT支援員の活用を積極的に進め、全教員の水準を上げていくことが望ましいとのことでした。指ヶ谷小学校においては特にICT教育への取り組みを保護者へ丁寧に説明し理解を求めているなど工夫されており、子供たちが1人1台端末を活用した学びを通して資質・能力を育成できるICT教育に取り組んでおりました。

子どもたちのICT教育について

山 本 一 仁

5月13日（金）、この間コロナの影響で順延となっていた、文教委員会の視察が無事に実施されました。今回の視察は、GIGAスクール構想における学びに関する調査・研究と題して、茗台中学校と指ヶ谷小学校にお邪魔させて頂きました。

昨年の4月より、児童・生徒に一人1台が配備され、タブレット端末を活用した授業の視察を行いました。年齢に応じた使い方が指導される中で、各学年ともレベルの高い授業が展開されていることが確認できました。

今後の課題としては、ICT教育に高い能力を有する職員の確保と職員研修の充実、そして子どもたちには、オンライン授業の普及による学校不登校との関連性の問題と、操作習得の格差が生じない指導方法の徹底など、幾つか指摘させて頂きました。何れにしても、今回の視察を通じて、グローバル社会で生き抜くための力を養う手段としてのICT教育が、ここ文京区でも着実に成果となって表れていることが確認できました。

ICTの取り組みによる生徒への影響と保護者の受け止め

のぐち けんたろう

茗台中学校では、現在すべての授業をオンライン配信しており、子どもたちが自身のタブレットで授業を受けているのが印象的でした。コロナ禍で学校に入ることができたのが久しぶりということもあり授業の状況が日進月歩で変わっていることがよくわかりました。著作権等の問題がありアーカイブには残せないというのが残念ではありますが、体調不良などで登校ができない場合でも学校の教室にいるのと変わらず授業を受けることができるのは大きな変化でした。また、不登校の生徒であっても、授業だけはしっかりついていくことができるので、学期や学年代わりなどの節目のときに学校に登校しても授業面での遅れがないことも大きなプラスです。

指ヶ谷小学校では、Society5.0を受けて教員同士のお互いのスキルアップに向けた実践などの説明を受けました。校長先生の話で印象的だったのは、学校にICTが導入されることによる不安感のほうが大きく丁寧な説明会を行ったというものでした。IT機器に慣れているはずの現役子育て世代であっても、教育にICTが入ってくることへの不安感などがあることは驚きでしたし、やはり昔ながらの意識というのは良くも悪くもすぐには変わらないということも認識できました。

本区のICT教育の推進状況について

松 平 雄一郎

ICT教育の推進状況を視察するため、生徒に一人一台配備されたタブレット端末を、積極的に活用した授業を行っている茗台中学校、指ヶ谷小学校の2校を訪問した。

コロナ禍、対面授業を受けられない状況となっても、学びを継続させるためのハイブリッド授業に積極的に取り組んでおり、ICTに精通した教職員やICT支援員と連携を取りながら、各担任の様々な工夫や努力を見ることができた。また、小学生低学年から中学生まで、それぞれの発達状況にあわせた学習ソフトの使用や活用の工夫がなされており、特に中学生のタブレット端末を的確かつスピード感を持って使いこなす様子は目を見張るものがあった。

タブレット端末は、生徒同士の意見の共有や交流手段などで多くのメリットがある一方、中にはアナログの方が授業の進行がしやすい部分に気づくなど、様々な事を実験的に行い、試行錯誤しながら新しい教育方法を研究している姿勢を両校とも感じる事ができた。今後は、全教員が同じ水準で授業ができるための体制づくりや、タブレットを毎日持ち帰る運用となる際の自宅での有意義な活用方法、また、登校する事が不安な児童に対しての自宅や保健室での授業参加の仕組みづくりなどが、検討課題だと感じる。